

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

4

2015

特集 農業の人材を育む力とは



農業の人材を育む力とは

3 人材育成に生かすナレッジマネジメント

伊藤 房雄

個人の知識やノウハウを組織全体で共有・活用して業績を上げる「ナレッジマネジメント」。その手法を概観し、農業への活用事例を紹介する

7 農業の経営託せる人材の育成を急げ

木村 伸男

人を育てることは、あらゆる経営の発展のカギを握る。農業法人の現場やアンケート結果から、農業における人材育成の方策を考察する

11 多様な人材取り込み異分野と連携を

木之内 均

人材育成システムが十分に機能しない農業界。多くの担い手を育ててきた非農家出身の筆者の取り組みと今後に向けての提案とは

情報戦略レポート

15 単独、夫婦のみ世帯が増加 食の志向は「健康」「経済性」強まる

—消費者動向調査の世帯分類別分析—

経営紹介

経営紹介 [特別編] ~アグリフードEXPO東京2015へ向けて~

23 国産小麦100%こだわりの 手延べそうめんを売り込む

株式会社坂利製麺所／奈良県

土地の小麦を利用した伝統製法により本物の味を追求。販路拡大の機会を求め、出展を続けるアグリフードEXPOの魅力と経験から得た教訓を聞く

変革は人にあり

27 大地 勝史

センナリ株式会社／広島県

「体によいものしかつからない」という先代の信念を貫く有機純米酢製造会社の三代目。徹底した品質保持のため、モノづくりへの姿勢を生産者と共有する



撮影：深澤 武

長野県白馬村 青鬼の棚田
2001年5月撮影

春を映す田んぼ

■白馬村北東部の山の麓にある青鬼集落には、石垣により形成された棚田がある。晴れた日、田んぼの水面に春が映る■

シリーズ・その他

観天望気

農業女子の情報発信力 伊藤 淳子 ……2

農と食の邂逅

古代豚白石農場 白石 光江
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) ……19

耳よりな話 157

耕作放棄地放牧への期待
山本 嘉人 ……22

フォーラムエッセイ

全ては畑から 神保 佳永 ……26

書評

日本農業新聞取材班 著
『鳥獣害ゼロへ！—集落は私たちが守るッ』
青木 宏高 ……30

まちづくりむらづくり

「田舎町再生」のお手本づくり目指して
子どもと大人が連携して活動する
相馬 康穂 ……31

AFCフォーラム総目次(2014年4月号~2015年3月号) ……34

みんなの広場・編集後記 ……37

ご案内

第10回アグリフードEXPO東京2015 ……38

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

観天 望気

農業女子の情報発信力

女性の活躍推進を経済政策の柱の一つとしているアベノミクスでは、二〇二〇年までに女性管理職の割合を三〇%に増やすという目標を掲げているが、女性が活躍する場面はオフィスの中だけではない。農業でも管理職はまだまだ男性が多いが、女性経営者も増えつつある。そんな女性農業者たちを応援するのが、一三年一月からスタートした「農業女子プロジェクト」だ。

農業に従事する女性たちの視点を生かして、商品やサービスを企業と共同開発するとともに、その取り組みを幅広く情報発信することで女性農業者の存在感の向上や農業従事者の増加などにつなげようという農林水産省の試みだ。現在、この企画に参加する農業女子は二五〇人を超えている。

農業女子たちが、これまでの女性農業者と違う点は何かと考えたとき、私は「情報発信力」ではないかと思う。三〇〜四〇歳の彼女たちは、パソコンやスマートフォンを使い、インターネットでの情報受発信を難なくこなす。自分たちのほ場の様子や収穫した農作物のレシピはもちろん、自身の写真も積極的に公開し、仕事中でも「美しさ」「かわいらしさ」を忘れず、女子力を発揮して常にキラキラと輝くライフスタイルを提案している。彼女たちと情報交換する際の主な連絡方法は、フェイスブックやEメールだ。しかも、昼夜を問わず、メッセージが数多く寄せられ、その反応の早さに驚いた。しかし、彼女たちが中高生だった一九八〇年代後半は「ニューメディア」と呼ばれる技術革新時代で、ページャー（ポケットベル）が大ブームだったことを考えると、ITによるコミュニケーション能力はそのころに培われていたといってもよいだろう。

かくして、新しい農業スタイルが、農業女子たちによって発信されていく。土にまみれた生産現場も、女子力によって魅力ある職場と生活の場として広まっている。

農業がより魅力ある産業に変わっていくためには、彼女たちのような情報発信者が増え、農業の現場を消費者に身近に感じてもらうことが大切なのではないだろうか。



公益社団法人日本フードスペシャリスト協会 理事
農業女子サポーター

伊藤 淳子

いとう じゅんこ

A-Girl Creative代表。女性の起業支援や女性マーケティングをはじめ、農工商連携や地域活性化の取り組みなどの講演多数。主な著書には「天職が見つかる女のお仕事バイブル」(PHP研究所)、『女性起業家・リーダー名鑑』(日本地域社会研究所)、『農業女子』(洋泉社、4月3日発行)など。

幻の品種に魅かれ
趣味から始めた養豚
今年三七年目の春
食べる人と豚への心配りを
忘れないように

農と食
の邂逅

白石光江さん

埼玉県児玉郡美里町
古代豚白石農場 代表

TPP(環太平洋連携協定)交渉の行方を待たずとも、養豚経営は経営合理化、効率化の努力を迫られている。その中で、こだわった飼育で消費者のニーズを的確にとらえ、オリジナルブランドの道を確立する家族経営がある。





P19:心から豚を愛し、育てる白石さんP20:1946年群馬県藤岡市生まれ。中ヨークシャー種にこだわり、生産から販売まで手掛ける功績が評価され、2005年農山漁村女性チャレンジ活動で農林水産大臣賞を受賞(右上)「豚の反応を見ながら育てる楽しさ、食べる人の反応が返ってくる楽しさもある」と言う(右下右) 家族の協力が支えとなっている(右下左) 光江さんに抱かれた子豚は笑っているよう(左)

消費者の視点に立つて

鼻は低く、足は短め、あごはしゃくれているが味は抜群。幻ともいわれる「中ヨークシャー」という品種の豚に魅了された人がある。

白石光江さん(六九歳)は学校教師の夫と結婚し、子育てをしながら「家計の足しになれば」と一九七八年から養豚を始めた。家計の足しに養豚を始める人は珍しい。「夫の両親が庭先で二、三頭豚を飼っていたし、動物も好きなので」とほほ笑む。

最初は一般的な品種を育てていたが、味にこだわりたいと欲が出てきた。母親が昔つくってくれた豚肉とネギの煮物のおいしさが忘れられなかった。近所の年配者からも「昔の豚肉はおいしかった」という話を聞いた。

そのおいしい豚こそが中ヨークシャーだった。五〇年代までは日本の豚の八割を占めていたが、日本人の豚肉消費量が増えるにつれ、同じエサの量でより大きく育つ生産効率の高い品種に切り替わり、味はいいのに出荷までの飼育期間が三、四カ月長くかかる中ヨークシャーは激減し、あつという間に「天然記念物級の幻の豚(光江さん)になってしまった。

だが、知れば知るほど興味が湧いた。運よく、地元にな数少ない中ヨークシャーのブリーダーがいたが、頭数が少なく、さらに長野や四国など各地を探し訪ねた。秩父の山奥にもいると知り、そこからも譲り受けた。

そして、多品種との交配を試み、特に相性に良い大ヨークシャーとの組み合わせで、「古代豚」と名付けて生産している。

肉にうま味があり、脂がさっぱりしていて臭みがない点特徴だが、光江さんはさらにうま味が出るよう、エサに大麦を加える。抗生物質は必要最低限に抑え、その分豚の状態を小まめに観察する。ストレスにならないよう一頭当たりのスペースも広めにとるなど、食べる人と豚への心配りを忘れなかった。

うわさを聞きつけた生協から取引したいとの申し出を受け、八一年から納めるようになった。光江さんは、育てた豚の肉は地元の消費者に食べてもらいたいと働きかけ、生協も了承した。

ところがその後、生協が建てた物流センターを経由して豚肉が供給されるように仕組みが変わり、配達地域を限定できなくなってしまった。時には冷凍肉になって届くこともあり、「前と味が違う」と言われることもあった。他の肉が混ざってしまったのだ。戸惑う光江さんに、「自分で売ったらどう？」と言う人が現れた。

応援をされて直販開始

それは生協を通じて白石農場の豚肉を買っていたファンの一人だった。知り合いを集めて豚肉の試食会を開く段取りまで組んでくれた。すると、「あまり好きじゃなかった豚肉が食べられ、豚肉に対する印象が変



規模拡大に伴い、2008年に新たに建てた豚舎。中ヨークシャーだけを専門に飼育する養豚家は全国でも少ないといわれる

わった「脂がギトギトしてなくて食べやすい」など大好評で、六〇件が申し込むまでに。ファンの人は「配達が大変だろう」と五人単位の班を編成し、班長にだけ配達する共同購入の仕組みまでつくってくれた。

それでも光江さんは悩んだ。直販をするとなると消費者向けにスライスしなければ

ならない。売りやすい部位と売りにくい部位があり、売れ残りはそのままロスとなる。

直販を決意したのは、夫の宗一さん(七四歳)と妙案を考えついたから。それが「お楽しみセット」だ。加工業者に頼んでヒレ、ロース、肩ロース、肩、モモ、バラ、小間、ひき肉という八部位に分け、スライスしてパッ

クしてもらおう。このうち三パックを毎週木曜日に配達する。どの部位が入っているかは開けてからのお楽しみ。光江さんは、顧客ごとに送った部位を記録しておき、長期にはどの人にも偏りなく届くようにする。顧客は毎回が楽しみだし、光江さんたちには売れ残りのリスクがない。

一九九九年に「幻の豚 古代豚」と商標登録もした。九六年から始めた配達先はいつの間にか三〇〇件に。定年退職した宗一さんも経営に加わり、二〇〇六年からは長男夫婦の宗宏さん(四五歳)、直美さん(四五歳)が加工施設を立ち上げた。委託していた精肉のパック詰めも自前でできるようになり、ハム・ソーセージなどの加工も始めた。

古代豚の小売価格は一般の豚肉の約一・五倍。それでも直販を始めて以来ずっと買いつけてくれる地元の顧客も少なくない。光江さんは、「食を大事にしたい、量は食べられないがおいしいものを食べたいという人が多い。食べてくれる人がいるから続けてこられた」と感慨深げだ。

食の画一化に歯止め

口コミで飲食店との取引も始まり、マスコミに取り上げられることもしばしば。ネットを通じて全国からも注文が入る。現在、年間の出荷数は八五〇頭。定期的な直販客や業務向けに「古代豚」のブランドで販売する。

三年前から三男の篤さん(三九歳)も経営に加わった。光江さんは将来的に法人化を

目指すつもりだ。光江さんと宗一さんが引退すれば、宗宏さんが生産部門も引き継ぐ予定だが、法人化すれば外の人も雇用しやすくなる。「家族に限らず、関心のある人が会社を継続してくれば」と願う。外部の人材も確保して基盤を固めようとする理由は、「中ヨークシャーを絶やさないようにするため」ときっぱり。

「手間がかかるから」経済効率が低いから」という理由で世の中から農畜産物が消えてしまうと、食卓には効率という網をくぐった食品だけになり、「結果的に食の質の低下を招くことになる」と光江さんは危惧している。

手間がかかるけれど守り続ける人がいれば、「ああすればいいかも」「直販だったらやっていけるかも」と、後に続くという人が生まれる。「吹けば飛ぶような小さい農場ですが、質の低下に歯止めをかける一端を担っていければ」と言う。

中ヨークシャーに切り替えた頃、周囲から「あんな伸びの悪い豚なんか飼って」「旦那が働いているからやれるんだ」などと陰で言われた。それでも、「おいしく安全な豚肉をつくらう」という夢のほうが勝り、やがて雑音は気にならなくなったという。あれから三七年。日々豚と接し、そしてお客さんの声に耳を傾けながら、光江さんはさらに大きな夢をはぐくんでいる。



(青山浩子／文 河野千年／撮影
白石農場／写真提供)

耕作放棄地放牧への期待

(独)農研機構 畜産草地研究所
草地管理研究領域長

山本 嘉人

白 然豊かな農村は、ここを訪れる都会の人々にとって、癒やしの空間であることは間違いない。

しかし、それは放任された自然空間ではなく、人がつくり上げた緑の空間である。自然に任せて人が関与しなければ、そこは草木が生い茂り、近寄ることも困難になるだろう。

農村の美しさは、人の管理密度に比例すると考える。すなわち、農地における生産管理だけでなく、畦畔けいはんの草刈り、水路の管理などに至るまで、全てはその地域に住む人々の地道な農作業の上に成り立っている。

一方、日本の人口は二〇一〇年をピークに減少へ転じた。農業従事者数が激減し、高齢化が進んでいるため、従来通りの農地面積を維持できずに耕作放棄地は増大している。立地条件が厳しい中山間地でも、農業が生業なりわいとして成り立ち、新規就農者が農村地域に定着できるように支援するシステムが不可欠である。

し かし、耕作放棄地を復活させても、人が管理するには限度がある。そこで、耕作放棄地を飼料生産の場として活用し、牛に草の採食(草刈り)をさせる放牧活用型畜産に期待が寄せられている。

放牧活用型畜産とは、飼料給与やふん尿処理に多くの労力を要する畜舎内飼養による畜



傾斜地でも放牧地として農地保全管理ができる

産に対して、飼養管理の省力化による低コスト化と国産飼料の活用を促進するために、部分的でも放牧飼養を取り入れたものを指す。現状では、家畜の栄養管理や良好な植生を維持する草地管理が畜舎内飼養と比べて難しいため、放牧活用型畜産の普及は小規模で限定的にとどまっている。

しかし、近年では夏季に畜舎周辺の耕作放棄地などを活用した繁殖牛のうち妊娠牛の放牧飼養が取り組まれつつある。集積した耕作放棄地を大規模な放牧地として活用し、妊娠牛に限らず子牛も含めて全て放牧飼養できれば、効率的な農地・家畜管理が可能となり、収益性が高い畜産業が成り立つ。

そこで、農研機構では放牧活用型畜産の普及に向けて、関係機関との情報交換会や放牧における生産性向上技術の実証試験を実施し、繁殖牛をはじめ、酪農や肥育牛でも、省力化による収益の向上につながる放牧活用型畜産体系を示しつつある。具体的には、太陽光発電を活用した家畜飲水の自動供給システムや労力を軽減できる草地の造成技術といった、さまざまな技術開発に取り組んでいる。

これが、飼養管理の省力化、耕作放棄地放牧の推進、そして耕作放棄地解消による農地保全の一助となることを願っている。

F



Profile

やまもと よしと
1960年福岡県生まれ。82年宮崎大学農学部農学科卒業。農林水産省草地試験場入省、九州農業試験場草地部主任研究官、畜産草地研究所草地管理研究室室長、同放牧管理研究チーム長、同上席研究員を経て、2013年から現職。農学博士。

Forum Essay

フォーラムエッセイ

二〇一〇年に、僕は以前から温めていた思いを実現するため、東京の青山にイタリア料理店「HATAKE」をオープンしました。その思いとは、野菜が持つおいしさに手を加え、その魅力を目一杯伝えることです。

僕が、野菜の魅力に目覚めたのは約一〇年前。日本屈指の調理師専門学校を卒業し、日本国内に留まらず、フランスやイタリアの高級レストランでも修業を積んだのですが、ここでは料理にトリュフ、フォアグラなどの高級食材をふんだんに使うことこそが重要でした。僕は、それが全てだと思いついていました。

転機は、二〇〇五年に、あるホテルのレストランの料理長になったことです。店は地域性もあって、今までのように高級食材ばかり使うことができません。ならば素材で勝負だ、と路線を変更したのですが、ベースになる野菜のことを分かっていたため、時季外れの野菜を調理しちゃう。当たり前ですが、味が出ないんです。

そのことも分からず悩んでいた時、ホテル内で物産展があり、千葉にある農業生産法人「珠樹自然農園」さんの完全無農薬無化学肥料で栽培されたトマトを食べました。それは、今まで味わったことのないおいしさ。驚愕でした。

目からウロコが落ちるような思いで、野菜について勉強しようと決心。三年間、時間をつくっては、珠樹自然農園さんをはじめ、全国の農家さんの畑へ伺いました。最初は、冬に「アスパラある？」と聞いて「あるかどうか畑を見てごらん」と笑われたことも。でも、畑は知れば知るほど発見があつておもしろい。

野菜の旬や魅力、土づくりの大切さなどを畑と農家さんに教えてもらいました。そして、野菜の素晴らしさは料理人だけでは伝えられない、農家さんがこだわりを持って育てた野菜があつてこそなんだということ、僕は学びました。

現在、一五軒の信頼する農家さんから、丁寧育てられた野菜がお店に届きます。そんな野菜を料理し提供できること、また、お客さまが料理をおいしいと喜んで食べてくださることを、僕はとても光栄でうれしく、誇りに感じています。



イタリア料理シェフ
神保 佳永

じんぼ よしなが
1977年茨城県生まれ。辻調理師専門学校でフランス料理を学ぶ。2010年「HATAKE AOYAMA」をオープン。全国の農家や漁師と連携しながら、旬を大切に料理を提供。近隣小学校で自身の経験を生かした食育授業などにも力を注ぐ。15年度より「いばらき食のアンバサダー」に就任。

全ては畑から

『鳥獣害ゼロへ！』

―集落は私たちが守るッ―

日本農業新聞取材班 著



(こぶし書房・1,800円 税抜)

地方を学ぶみんなの教科書

青木 宏高

(NPO法人「良い食材を伝える会」理事)

本書第八章「克服の糸口 識者に聞く」の中に鳥獣害解決策が語られていて、旅行関係者からの「ジビエを活用した学習型観光」の提案がある。地方のおいしい物を食べる物見遊山型から、社会的な課題を現場で体験する学習型の旅の提案である。

東日本大震災以降、サステイナブル(持続可能な)な生き方を国民が求める傾向にある。観光で人の往来を頻繁にし、野生動物を食用や皮製品にするなど地域資源として活用する。なるほど、目が止まった。

この本は野生動物に襲われた日本列島、とりわけ農村地域の鳥獣害実態を活写したドキュメントで、一〇〇カ所を超える日本列島の「人」と「地域」の暮らしの報告書ともいえるべき内容である。もちろんテーマは鳥獣害であるが、政府が進

めている「地方創生」に関わるヒントも多く含まれている。

鳥獣害は宿命ともいえる農業だが、被害は年々増え、その額二〇〇億円を超える。イノシシやクマ、シカ、サルに圧倒された里山の生活圏は壊され、同時に人口減少と高齢化地域は耕作放棄地を増やして、そこが野生動物の侵入を容易にさせる。もはや問題は農業者だけでなく、地方、国のレベルになってきているが、政府は昨年、野生鳥獣行政を「保護」から「捕獲」へ切り替え、撲滅対策に取り組み始めた。一方で、捕獲対策には猟友会の高齢化など課題が多い。

もう二十数年前になるが、山間地果樹園の友人がわなを仕掛け、畑に出没するイノシシを仕留めたので食べにこいと言う。その夜、園内で始まった供宴は野趣に富む刺し身、鍋のフルコース。その時、農家に連綿と続くこの風景がもう一つの暮らし方なのかと気付かされ、酔った思い出がある。

ページをめくるごとに「野生動物と共存」などとのんきなことではなく、切実な戦いの思いが迫り、「人」と「地域」の暮らしに思いをはせる。

厚生労働省も衛生管理ガイドラインの全国統一基準を出し、衛生的な食肉処理場の整備を図って販路拡大に目を向ける。学習型旅行も、ジビエ料理も「地方創生」の可能性の一つ。地方が、農村が生きられない先には、どんな国家があるのか。この本はそれを教えている。地方を知る教科書として必読の書である。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店(2015年2月1日~2月28日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農山村は消滅しない	小田切 徳美/著	岩波書店	780円
2 コメをやめる勇氣	吉田 忠則/著	日本経済新聞出版社	1,800円
3 農業と経済2015年3月臨時増刊号 食料・農業・農村基本計画の見直し		昭和堂	1,619円
4 週刊ダイヤモンド2014年11月29日号 JA解体 農業再生		ダイヤモンド社	657円
5 プロが教える農業のすべてがわかる本 日本農業の基礎知識から世界の農と食まで	八木 宏典/著	ナツメ社	1,500円
6 続・農業と農政の視野 論理の力と歴史の重み	生源寺 眞一/著	農林統計出版	1,800円
7 スマート・テロワール 農村消滅論からの大転換	松尾 雅彦/著、浅川 芳裕/構成	学芸出版社	1,800円
8 牛をすこし深読みしてみると	増田 淳子/著	農林統計協会	1,800円
9 農協・農委「解体」攻撃をめぐる7つの論点	田代 洋一/著	筑波書房	750円
10 EU共通農業政策改革の内幕 マクシャリー改革 アジェンダ2000 フィシュラー改革	アルリンド・クーニャ、アラン・スウィンバンク/著	農林統計出版	3,500円



「田舎町再生」のお手本づくり目指して 子どもと大人が連携して活動する

青森県大鰐町

OH!! 鰐元気隊 相馬 康穂

「子どもに夢を」が出发点

青森県津軽地方の南端に位置する大鰐町おおわこまちは、豊かな自然と緑に恵まれている。開湯八〇〇年の歴史を持つ大鰐温泉と百年近い伝統を誇る大鰐スキー場は多くの観光客から人気がある。

一九七〇年代後半〜九〇年代の初めにかけて、大鰐はスキーブームとバブル景気に乗り、温泉街やスキー場はたくさんたくさんの観光客で賑わった。さらに、町はリゾート開発にも着手し「スパガーデン湯」とびあびあを開業、一時は活況に沸いていた。

しかし、バブルの崩壊とともにわずか数年で湯くとびあは閉鎖。町は、一気に一〇〇億円余りの負債を抱え、財政難へ陥った。そして、報道各社はその日を境にこぞって「スキーリゾート開発の失敗で破綻した町」と書き立てた。これらの風評被害も重なり、九一年には九三万人だった観光客が二〇〇四年には三七万人と激減し、町

は活気をなくしていった。「大鰐温泉スキー場」は一度も閉鎖していないのに、町民までもが「スキー場も潰れ、町は倒産するかもしれない」という噂を本気にするようになっていった。

町内の子どもたちは、その大人たちの話を耳にし、報道を目にし、生まれ育った自分たちの町に誇りや感謝の気持ちを持つてなくなっていた。私も、ちょうどその頃、子どもが生まれ、将来に不安を抱きながら「このままではいけない。まずは、子どもたちに夢や希望を与える行動を起こさないと」と思い始めた。

残念なことだが、当時、周囲の仲間たちや地域住民のほとんどが、その時すでに、子どもたちに対し「大鰐は借金まみれの町でもうダメだから、大きくなったら東京や大阪に行って頑張りなさい」と言うのが当たり前の会話になっていた。このため「このままでは、三〇年、いや二〇年後には、本当に廃墟の町になってしまう」なんとか早く手を打たないととの危機感が日に日に強

くなっていった。

〇七年七月七日、私は三人の仲間を集め、その思いを伝えた。そして、二回目の集会には後のコアメンバーとなる商工会青年部OBや異業種（特に農家）などの仲間たち一六人が集まり全員（特に農家）などの仲間たち一六人が集まり全員の賛同を得、民間主導の地域おこしグループ「OH!! 鰐元気隊」を立ち上げることにした。「設立総会までに、一人当たり一〇人を集めよう」と話し合った。そして、三カ月後の一〇月四日、一七〇人もの住民を集め、元気隊が発足した。

最初の半年間は、グループ討議を行うワークショップとコアメンバー会議（役員会）を重ね、翌年春には、まだ創立半年余りの元気隊が生意気にも町役場（町長）へ、町活性化のため共同で活用したいとアクションプランを提出した。「地域の資源まるごとプロジェクト」「みんなが楽しいふるさとづくりプロジェクト」「みんなが一緒にがんばるべしプロジェクト」の三つのプロジェクトの中に、それぞれ四つのアクションを



profile

相馬 康穂 そうま やすのり

1983年青森県立弘前実業高等学校卒業。95年から大鰐町商工会青年部長。99年から全国商工会青年部連合会副会長。2007年「OH!! 鰐 元気隊」を立ち上げる。現在、青森公立大学他、非常勤講師なども務めている。講演回数、約200回。好きな言葉は「一生勉強一生青春」「心をこめて」

OH!! 鰐 元気隊

バブル崩壊で町のリゾート計画が破たんし、それをきっかけに広がった風評被害に歯止めをかけると同時に、田舎町の再生のお手本づくりを目指そうと取り組む民間主導の地域おこしグループ。2007年に立ち上げられた。「ホスピタリティ世界」を理念に掲げ、活動に汗している。

盛り込んだ、計一二項目に及ぶプランである。当時の町長、担当課長は、これを快く受け取ってくれ、私たちの活動が始まった。

「元気隊キッズ」たちが主役

今回はその中の一つ、「元気隊キッズ・アクションプラン」の活動について紹介したい。

二〇〇八年夏、一学期の終業式を間近に控えた頃、元気隊コアメンバー数人で、地元の大鰐小学校を訪れた。校長、教頭、そして後に元気隊キッズ担当教員となる工藤良信先生の三人とミーティングをした結果、二学期から当時五年生を「OH!! 鰐 元気隊キッズ」と名付け、活動をスタートすることが決まった。初年度は大鰐町のよい物探し研究とその発表会を行った。

〇九年春からは、六年生になった元気隊キッズ一期生に、五年生の二期生が加わった。そして、主な活動を町内掃除ボランティア、野菜の生産と販売体験学習とした。

掃除ボランティアは、毎月、元気隊キッズ五人に大人の元気隊員一人のグループで、町の観光名所や駅周辺、高速バス停車場などの清掃活動に取り組むものだ。

大人の元気隊員は事前ミーティングを行い、子どもたちとの清掃時のルールを作成した。子どもたちに対して、町の批判は一切しないこと、大鰐の名産品や特産品の素晴らしさを伝えること、さらに、将来の大鰐はもっとすばらしい町になるなど、ポジティブ発言しかしない約束を交わした。掃除を始めて数カ月たつと、早速その効

果が表れ始めた。「僕たち、私たちが、大鰐町を元気にするぞ」「町をきれいにして観光客を呼び込もう」「キッズ野菜をつくって東京に売り込むぞ」など、うれしいことに子どもたちがみずから夢を語るようになっていった。

「元気隊キッズ野菜」の生産では、まず、コアメンバーが学校の課外授業として、農業と物流、小売業、飲食店やホテルなどの販売の仕組みなどを教えた。「これから、みんなが野菜をつくって、秋には東京の一流レストランやアンテナショップに売り込むぞ。でも、キッズ野菜が一万円売れたとしても全て収入にはならないんだよ！ 運送屋に二〇〇〇円、販売するお店の手数料が二〇〇〇円、間に入る問屋に二〇〇〇円支払い、キッズ隊には四〇〇〇円しか入らない。これが農業



上：町内を掃除中の元気隊キッズ。「きれいになってうれしいね」
下：「あおもり北彩館」で販売体験直前の様子。元気隊キッズは緊張ぎみ

と物流の仕組みなんだ。レストランのシェフは、その野菜を仕入れ、肉や魚と一緒に調理し、お客さまに提供するんだ」と、まさに子どもたちと社会勉強をしながらの町の再生への取り組みだ。

また、野菜ソムリエを招き、これから流行する新しい野菜の種類についても学び、「インカのみぞめ」「レッドアンデス」といった新種のジャガイモなども、古くから青森で生産されてきた在来の枝豆「毛豆」などととも栽培することにした。こうして、大人の元気隊員、元気隊キッズ、先生や学校近隣住民が一体となり、野菜づくりが始まった。

販売体験学習の舞台は東京だ。約一〇年前から、毎年一〇月第一月曜日からの一週間、千代田区にある青森県のアンテナショップ「あおもり北彩館」で「おおわにフェア」を開催し、たくさんのお客さまに喜んでいただいている。その期間中の土曜日と日曜日の二日間、OH!! 鰐 元気隊キッズ野菜デー」とし、元気隊キッズが学習の環境として販売体験をする。

二学期に入ると、参加児童の募集と保護者への説明、バス、宿泊の手配、出荷野菜の収穫やパック詰め、POP作成、そして資金集めなどの準備に追われる。九月中旬、参加者が確定すると、工藤先生にお願いし、元気隊キッズ全員が自分たちでオリジナル名刺を作成する。

人生初の名刺交換

「キッズ野菜デー」前日の金曜日の夜、元気隊キッズ約一〇人と工藤先生を含む大人の元気隊員五人を乗せたマイクロバスが大鰐を出発する。

車中では、大人の元気隊員が元気隊キッズへ名刺入れをプレゼントし、名刺交換の仕方の特訓する。そして、キッズ野菜デーの当日である翌朝、アンテナショップ前では、私たち先発隊とおもりに北彩館店長以下、店員が繰出で歓迎。まず、元気隊キッズは店長と名刺交換に挑む。人生初の名刺交換を大鰐の子どもたちは六年生で体験するのだ。「鰐カム朝礼」という独特の挨拶訓練をし、販売、アンケート調査、試食・試飲の三チームに分かれ、二日間の販売体験学習プログラムが始まる。最初は、声も小さかった元気隊キッズも、すぐに慣れ始め、昼頃には、一人前の販売員となる。夕方まで三チームが時間ごとチェンジし、それぞれの仕事をこなすのだ。

夜はレストランを貸し切つて、ビッグイベント「大鰐町PR交流パーティー」を開催する。パーティーで使う食材は全て大鰐のものだ。一部には、キッズ野菜も登場する。

そして、著名人や名士の方々が集う。世界的フードジャーナリストの先生、輸入車ディーラー社長、大手百貨店バイヤー、省庁職員、青森県庁職員、警察庁職員、大手ハンバーガーチェーン社長、一流レストランシェフなど、多彩な顔ぶれだ。元気隊キッズは、この方々とも堂々と名刺交換をし、会食しながら大鰐町や自分の夢を語り合う。出席者は大鰐町の優れたところや「大鰐温泉もやし」をはじめとする特産品のブランド力、その将来性など、ポジティブな発信をしてくださる。大鰐のすばらしさを元気隊キッズへリピートし、和やかに終宴。

元気隊キッズは二日目の販売体験も終えた日

曜日の夜、一路、大鰐へ戻るのである。各家庭へ帰ると、元気隊キッズたちの開口一番は、決まっていた。昨夜のパーティーで交換した方々の名刺を自慢げに差し出し、「昨日、会った人たちは、みんな、大鰐は素晴らしい町だし、将来はますますよい町になるって」「元気隊キッズの活躍はすごい。これからも自信と誇りを持ってがんばってね、と言ってたよ」

大人たちの気持ちも動かす

翌日、お父さん、お母さんたちから私たちは電話を受ける。「東京で交換してきた名刺を見せながら、目をキラキラさせて話すわが子に、頭をガツンと叩かれた思いだ」「今まで、町の悪口や財政難の話ばかりしてきた自分を恥ずかしく思う。気付きをもらった。ありがとう」と。

お父さん、お母さんは、キッズ活動やその他の「OH!! 鰐 元気隊」の活動にますます協力的となり、私たちの活動は、年々スムーズになっているように思う。

ここで、締めくくりの話をしたい。「ふるさと教育」という言葉を、ご存じだろうか？ 教育の三本柱「学校、社会、家庭」教育に次ぐ、第四の教育のことを指す。日本の地域おこしの第一人者・萩原茂裕先生が約三〇年前から提唱してきた教育論だ。萩原先生は、一九九〇年、講演会でお会いしたのをきっかけに、私たちの取り組みを指導し、助言をくださっている。私たちの人生の師の教えを、今こそ「日本の田舎町再生」に活用すべきではないだろうか。これからも人生を賭けて、ふるさと大鰐の再生に挑戦し続けていきたい。

2014年4月号(第764号)

*バックナンバーはホームページ(www.jfc.go.jp/n/findings/publish.html)からご覧いただけます。

新規就農への扉を開ける

■特集	新規就農者の経営課題とチェック手法 農業公社がつくりあげた就農者育成の実践 現場体験から得た新規就農者の定着対策	澤田 守 善宝 忠文 鈴木 貴博
■情報戦略レポート	2013年下半年 食品産業動向調査	
■経営紹介	株式会社兼平製麺所/岩手県	
■変革は人にあり	河島 伸浩 株式会社河鶴/和歌山県	
■観天望気	簡便社会と日本食	八丁 信正
■農と食の邂逅	農工房長者株式会社 林 絹江	青山 浩子
■耳よりな話	南西諸島で進むカンキツグリーンング病の防除	岩波 徹
■フォーラムエッセイ	四季のある日本の食の素晴らしさ	姿月 あさと

■まちづくりむらづくり	特定非営利活動法人十日町地域おこし実行委員会	山本 浩史
■書評	夏井 睦 著「炭水化物が人類を滅ぼす 糖質制限からみた生命の科学」	青木 宏高
■その他	AFCフォーラム総目次(2013年4月号~2014年3月号) みんなの広場・編集後記 第9回アグリフードEXPO東京2014	

2014年5月号(第765号)

女性農業者、次代の胎動

■特集	女性プロ農業者が活躍する環境づくり 女性のパワーは日本農業を変えるか 攻めの「おばちゃんパワー」で夢を実現	原 珠里 榊田 みどり 新開 玉子
■情報戦略レポート	2013年下半年 農業景況調査	
■経営紹介	セブンフーズ株式会社/熊本県	
■変革は人にあり	早坂 亮二 株式会社白亜ダイシン/北海道	
■観天望気	混濁林の再生を	神崎 宣武
■農と食の邂逅	株式会社愛プラント 武井 美枝	青山 浩子
■耳よりな話	畜産は資源の宝庫	澤村 篤
■フォーラムエッセイ	忘れがたき御講汁の味わい	清 絢

■まちづくりむらづくり	いきいき深山郷づくり推進協議会	須田 信一
■書評	平川 克美 著「移行期的混乱—経済成長神話の終わりに—」	宇根 豊
■農林水産省からのお知らせ	新規就農者を応援する制度と資金が新しくなりました	
■インフォメーション	「山梨県AFC交流会」に集う 「フードネットin北海道」を開催 第9回「アグリフードEXPO東京2014」の出展者を募集しています	甲府支店 札幌支店、帯広支店、北見支店
■交叉点	アジア・アフリカの農業金融関係者が広島の実地農業を視察	広島支店、情報企画部
■その他	みんなの広場・編集後記 第9回アグリフードEXPO東京2014	

2014年6月号(第766号)

地域農業活かす企業参入

■特集	企業の受け入れは地域農業活性化への近道 農業参入企業の支援に動く地方自治体 企業の農業参入・経営実践の現場報告	堀 千珠 山本 善久 福永 庸明
■情報戦略レポート	2013年度下半年 消費者動向調査	
■経営紹介	マル井水産有限公司/長崎県	
■変革は人にあり	衣笠 愛之 有限会社夢前夢工房/兵庫県	
■観天望気	日本文化を創った農業	松谷 明彦
■農と食の邂逅	ベジキッチンまいまい 佐々木 和枝	青山 浩子
■耳よりな話	日本のオリジナル技術「種なしスイカ」	吉岡 宏
■フォーラムエッセイ	いつの間にか缶詰ライフ	黒川 勇人

■まちづくりむらづくり	くろべ漁業協同組合 魚の駅「生地」	富山 俊二
■書評	大泉 一貫 編著「農協の未来」	村田 泰夫
■インフォメーション	農林漁業、食品産業向けの融資実績は3318億円に~担い手農業者向け融資伸びる~ [第13回常陽食の商談会]を開催 茶の湯文化をたどる「全国茶業交流会」を開催 [長崎県公庫水産友の会]を開催 ミャンマーの政府・外食産業関係者が先進農業を視察 新規就農を希望する方へ みんなの広場・編集後記 第9回アグリフードEXPO東京2014	情報企画部 水戸支店 奈良支店 長崎支店 千葉支店
■交叉点		
■その他		

2014年7月号(第767号)

農地集積、来た道往く道

■特集	増加する農地貸し出しと法人経営の存在感 農地中間管理事業で農地集積・集約加速化へ 農地の面的集積が進む現場からの声	生源寺 真一 渡邊 毅 福原 昭一
■情報戦略レポート	2013年度畜産経営の要因分析調査(酪農・肉用牛肥育編)	
■経営紹介	株式会社山田鶏卵/山形県	
■変革は人にあり	小田々 智徳 有限会社大地と自然の恵み/高知県	
■観天望気	焼畑という自然観	原田 信男
■農と食の邂逅	るるる♪キッチンガーデンくらぶ 木村 光江	青山 浩子
■耳よりな話	酪農関連の碑めぐり(その6)	加茂 幹男
■主張・多論百出	農業・農村マーケティング研究所	二木 季男

■フォーラムエッセイ	ベランダ菜園の時間	川瀬 良子
■まちづくりむらづくり	財光寺農業小学校	二見 順雄
■書評	井上 ひさし 著/山下 惣一 編「井上ひさしと考える日本の農業」	青木 宏高
■インフォメーション	県内農業法人向けセミナーを開催 創造力あふれる高校生のビジネスプランを大募集 グランプリ運営事務局 アプラカ理事会・総会に参加 新規就農を希望される方へ みんなの広場・編集後記 第9回アグリフードEXPO東京2014	熊本支店 情報企画部
■交叉点		
■その他		

2014年8月号(第768号)

日本の食、海外進出の課題

■特集	農水産物輸出のカギ握る物流システム整備 GAPは輸出先国による非関税障壁か 日本食の文化と連携し抹茶を世界に	林 克彦 今瀧 博文 杉田 芳男
■情報戦略レポート	2013年度畜産経営の要因分析調査(養豚一貫・採卵鶏編)	
■経営紹介	丸秀醤油株式会社/佐賀県	
■変革は人により	佐藤 賀一 有限会社うしちゃんファーム/宮城県	
■観天望気	日本農業の2つの進路	甲斐 諭
■農と食の邂逅	農事組合法人ウエスト・いかち 藤田 順子	青山 浩子
■耳よりな話	病原体封じ込める高度研究施設	横山 隆
■主張・多論百出	金沢大学 人間社会環境研究科	香坂 玲

■フォーラムエッセイ	食の世界へ、冒険に。	鈴木 亜美
■まちづくりむらづくり	坂本グリーンツーリズム運営委員会	海川 喜男
■書評	関 曠野・藤澤 雄一郎 著「グローバリズムの終焉」	宇根 豊
■インフォメーション	日本公庫農林水産事業本部長の新任のごあいさつ 新規就農を希望される方へ みんなの広場・編集後記 第9回アグリフードEXPO東京2014	
■その他		

2014年9月号(第769号)

「食」の信頼を取り戻す

■特集	HACCPの導入義務化に備え、動き出せ 新食品表示法は消費者の信頼築けるか ISO取得を好機にリンゴ経営に活路	山本 茂貴 池戸 重信 竹谷 勇勝 長瀬 直人
■情報戦略レポート	新日本スーパーマーケット協会消費者アンケート調査	
■経営紹介	農事組合法人ツグブチ/大阪府	
■変革は人により	横山 賢一 株式会社横山農園/愛知県	
■観天望気	「ないない尽くし」の転換	宮崎 清
■農と食の邂逅	ファームガーデン空詩土 野村 加奈子	青山 浩子
■耳よりな話	放射性セシウムの量を正しく測る	濱松 潮香
■フォーラムエッセイ	「JAPANESE TEA PARTY」	茂木 雅世
■まちづくりむらづくり	春蘭の里実行委員会	多田 喜一郎

■書評	荘林 幹太郎・木村 伸吾共 著「農業直接支払いの概念と政策設計」	村田 泰夫
■インフォメーション	農業ビジネスの動向について大学生に講義 新しい資金調達を模索するセミナー 農林水産物輸出支援の勉強会 日本一幸せな従業員をつくる！交流会を開催 「中国四国ブロック農林水産交流会」を開催 「第19回農業経営アドバイザー研修・試験」を実施 「農水産物・食品輸出セミナー」を開催 「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています！ タンザニア行政官ら一行が日本公庫来訪	津支店 大津支店 山形支店 九州地区統轄 中国四国地区統轄 情報企画部 情報企画部 情報企画部 情報企画部
■交叉点		
■その他	新規就農を希望される方へ みんなの広場・編集後記 第8回アグリフードEXPO大阪2015	

2014年10月号(第770号)

水産市場、拡大の羅針盤

■特集	水産物輸出拡大の課題にチャレンジを グローバル市場を攻めるこれからの養殖業 水産現場に広がる六次産業化で市場拡大	長岡 英典 有路 昌彦 天野 通子
■情報戦略レポート	2014年度上半期 消費者動向調査	
■経営紹介	株式会社エフシーエス/北海道	
■変革は人により	飯島 達成 モンデ酒造株式会社/山梨県	
■観天望気	魚の黒船「サーモン」	鷲尾 圭司
■農と食の邂逅	有限会社谷口屋 谷口 富士子	青山 浩子
■耳よりな話	トマト栽培から始まった雨よけ栽培	吉岡 宏
■フォーラムエッセイ	今宵、一献いかがでしょうか	あおい 有紀

■まちづくりむらづくり	特定非営利活動法人 かみえちご山里ファン倶楽部	関原 剛
■書評	林 邦雄 著「かっこいい養豚への挑戦」	青木 宏高
■インフォメーション	第8回「アグリフードEXPO大阪2015」の出展者を募集しています 「EXPO東京」は商談引合件数が過去最多 静岡県農業経営アドバイザーミーティングを開催 若手農業者が参加するワークショップを開催 「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています！ 新規就農を希望される方へ みんなの広場・編集後記 第8回アグリフードEXPO大阪2015	情報企画部 情報企画部 静岡支店 前橋支店 情報企画部 情報企画部
■その他		

2014年11月号(第771号)

「医福食農」連携の時代

■特集	医療福祉と「食農」の連携でつくる社会 高齢社会の新しい介護食品提供システム 奈良県は世界の「漢方のメッカ」を目指す 奈良県漢方のメッカ推進プロジェクトチーム	吉川 敏一 東口 高志
■情報戦略レポート	2014年度上半期 食品産業動向調査	
■経営紹介	空浮ストロベリーガーデン/香川県	
■変革は人により	山下 義仁 有限会社大崎農園/鹿児島県	
■観天望気	農園での結婚式	茂木 信太郎
■農と食の邂逅	土っ子田島farm 湯田 江美	青山 浩子
■耳よりな話	酪農関連の碑めぐり(その7)	加茂 幹男

■主張・多論百出	食総合プロデューサー	金丸 弘美
■まちづくりむらづくり	綾部市定住交流部水源の里・地域振興課	大島 憲一
■書評	中村 靖彦 著「コメはコメなり、田は田なり」	宇根 豊
■インフォメーション	「アグリフードEXPO輝く経営大賞」決定 食品輸出のためのハラールセミナー開催 「いわて食の大商談会2014」を開催 農村女性リーダーネットワーク研修会で講演	情報企画部 千葉支店 盛岡支店 鹿児島支店
■交叉点	香港の食品見本市に初参加	情報企画部
■その他	新規就農を希望される方へ みんなの広場・編集後記 第8回アグリフードEXPO大阪2015	

2014年12月号(第772号)

進化続ける食品流通の今

■特集	大手総合スーパーに学ぶ食品物流の革新 流通革新が食品ロス削減を進める EDI導入で生鮮食品取引の流通革新を	木島 豊希 上原 征彦・中 麻弥美 田中 成児
■情報戦略レポート	2014年上半年期 農業景況調査	
■経営紹介	株式会社大山どり／鳥取県	
■変革は人にあり	大杉 芳克 有限会社ボタニカルガーデン大杉／静岡県	
■観天望気	明日の地方農業の景色	星野 次汪
■農と食の邂逅	有限会社池田牧場 池田 喜久子	青山 浩子
■耳よりな話	高生産性技術の強み	島田 信二
■主張・多論百出	インターナショナル・バリューマネジメント協会	木村 耕一

■フォーラムエッセイ	江戸下級武士の食卓	青木 直己
■まちづくりむらづくり	新雲出川物語推進委員会	畑井 育男
■書評	宇根 豊『農本主義が未来を耕すー自然に生きる人間の原理』	村田 泰夫
■インフォメーション	「農業参入・六次産業化セミナー」を開催 農業参入や事業拡大を専門家が助言するサロンを開催 農業者と地場産志向の企業をマッチング 徳島ビジネスチャレンジメッセ2014でセミナーを開催	鳥取支店 広島支店 松山支店 徳島支店
■その他	新規就農を希望される方へ みんなの広場・編集後記 第8回アグリフードEXPO大阪2015	

2015年1月号(第773号)

「地域の宝」を育てよう

■特集	ローカル・フードシステムの見える化を 埋もれた地域資源にビジネスチャンス 地理的表示法で「地域の宝」を生み出せ	三石 誠司 鎌田 由美子 川端 美枝
■特別企画	平成26年度アグリフードEXPO輝く経営大賞 経営部門(東日本エリア) 株式会社ミスズライフ／長野県	
■経営紹介	有限会社わくわく手づくりファーム川北／石川県	
■変革は人にあり	渡部 一男 農事組合法人樽見内営農組合／秋田県	
■観天望気	大地に根付く逞しい農民群像	長澤 真史
■農と食の邂逅	有限会社三蔵農林 片岡 未穂子	青山 浩子
■耳よりな話	甘ガキか? 渋ガキか?	三谷 宣仁

■フォーラムエッセイ	提言。お米は人生の熱量です！	フォーリンデブ★はっしー(橋本 陽)
■まちづくりむらづくり	レストラン・ビブレ	齋藤 壽
■書評	山下 悠一 著『日本人は「食なき国」を望むのかー誤解だらけの農業問題』	青木 宏高
■交叉点	シンガポール訪問記～国産農産物輸出拡大の可能性を探る～ 香港などのパイヤーが農業法人や食品企業と商談	情報企画部 千葉支店
■インフォメーション	認定農業者向け経営セミナーを開催 販路開拓テーマに講演会を開催し盛況 子ども絵画展2014の農林水産事業本部長賞を決定	横浜支店 長崎支店 情報企画部
■その他	新規就農を希望される方へ みんなの広場・編集後記 第8回アグリフードEXPO大阪2015	

2015年2月号(第774号)

国産材の内需は増えるか

■特集	木材利用の開拓こそ自給改善のカギ 地域主導型バイオマスの成功事例を 期待高まる、21世紀型建材「CLT」	五十田 博・南 宗和 相川 高信 中島 浩一郎
■特別企画	平成26年度アグリフードEXPO輝く経営大賞 経営部門(西日本エリア) 有限会社フクハラファーム／滋賀県	
■経営紹介	有限会社廿原ええのお／岐阜県	
■変革は人にあり	鈴木 通夫 丸善木材株式会社／北海道	
■観天望気	農業が持つ豊かな教育的機能	奈須 正裕
■農と食の邂逅	株式会社高梨農園 高梨 尚子	青山 浩子
■耳よりな話	沖縄がルーツの「べたがけ栽培」	吉岡 宏

■主張・多論百出	NPO法人鳴子の米プロジェクト	上野 健夫
■フォーラムエッセイ	ヒップホップでお料理を	DJみそしるとMCごはん
■まちづくりむらづくり	田染荘荘園の里推進委員会	蔵本 学
■書評	中島 岳志 著『血盟団事件』	宇根 豊
■インフォメーション	「公庫林業資金友の会」を開催 オホーツクで農と食の講演会が盛況 第11回「アグリネットワーク秋田」を開催 九州経済連の木材輸出の取り組みを後援	京都支店 北見支店 秋田支店 九州経済連合会
■交叉点	農業金融の国際会議に出席	情報企画部
■その他	みんなの広場・編集後記 第8回アグリフードEXPO大阪2015	

2015年3月号(第775号)

農に活かす異業種の「知恵」

■特集	顧客満足、利益・雇用確保を実現する農業へ 異業種のビジネス手法を農業に生かす 生産性を上げた「トヨタのカイゼン」手法	藤本 隆宏 楠元 武久 木村 誠
■情報戦略レポート	2013年農業経営動向分析	
■経営紹介	有限会社川淵牧場／高知県	
■変革は人にあり	石原 和秋 イシハラフーズ株式会社／宮崎県	
■観天望気	持続可能な社会の原則	谷口 吉光
■農と食の邂逅	株式会社アグリー 井上 早織	青山 浩子
■耳よりな話	酪農関連の碑めぐり(その8)	加茂 幹男
■フォーラムエッセイ	大切にしていきたいこと	水野 真紀

■まちづくりむらづくり	おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会	
■書評	小田切 徳美 著『農山村は消滅しない』	村田 泰夫
■交叉点	千葉産農産物の輸出拡大へ～千葉支店の現場レポート～ タイでビジネスチャンスを支援する商談会を開催	情報企画部
■インフォメーション	宮崎のスーパーで佐賀の物産フェアを開催 新規就農者へ経営方法をアドバイス 信州でビジネスチャンステーマに講演会を開催 「アグリフードEXPO大阪2015」は両日とも盛況 「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています!	佐賀支店 鳥取支店 長野支店 情報企画部
■その他	みんなの広場・編集後記 第10回記念 6次化の先駆者ーEXPO仲間大集結 アグリフードEXPO東京2015	

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する「AFCフォーラム」「アグリ・フードサポート」のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

◆三月号特集「農に活かす異業種の「知恵」」を読み、今までの農業に、工業、商業などの手法を取り入れていけば、過去にない農業の在り方が見つかり、また実践されていることに嬉しく思いました。

農業従事者は高齢者が多いと聞きます。後継者には、今までの経験に新発想で異業種の知恵を取り入れ、新たな農業へのビジネスチャンスをつかんでほしい。

「トヨタのカイゼン」手法は、自動車産業以外にも参考にしている企業が多々ありますが、農業分野にも進出しているのには驚いています。

農業分野の勘に頼る慣行的技術

が多いものをマニュアル化すれば、誰にでも作業ができるなど、これからの日本の農業は新しい形に進化・発展することを確信しました。(広島市 亘幸男)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。

「郵送およびFAX先」
〒100-0004
東京都千代田区大手町一-九四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三五〇

編集後記

④農業が地域雇用の拡大をけん引する時代も間近と信じたい。人材の裾野を広げるには、農業者自身がかの育成を意識しノウハウをいかに形式知として共有できるかがカギだと感じました。さて、四年間務めた編集長を今号でバトンタッチし、次号からは新体制でお届けします。引き続き、弊誌をよろしく願っています。(竹本)

④貯金箱そっくりの「農と食の邂逅」の白石さんの古代豚。そう言えば、昔の豚肉は特有の香りと噛むとしつかりしたうま味が感じられました。肥育に時間をかけ、消費者に納得のいく豚肉を提供している白石さんのこだわりようは、家計の足しから始まったとは思えない奥深さを感じます。昔、母にねだったカレーを思い出しました。(小形)

④地域農業を担うのは、農業への熱い思いと広い視野を持つて、黙々と、そしてがむしゃらに続けられる人。こんな素地がある人になり「土台」をたたき込もうと木之内さんは日々奮闘されています。入口が広いのはいいけれど、「農業やればお金もらえるんでしょ？」と誤解して来る人には困惑してしまっています。(城間)

④変革は人にある」で紹介した大地社長はかつて有機米の生産者を探し出し、契約に至るまで多くの苦勞を重ねたそうです。それでも有機にこだわるのは、同じモノづくりへの姿勢を共有する生産者を支えたい思いがあるから。こんな素敵な連携が増えれば、有機農産物のマーケットはさらに広がることでしょう。(林田)

AFCフォーラム Forum

- 編集
大本 浩一郎 竹本 太郎 清村 真仁
小形 正枝 飯田 晋平 城間 綾子
林田 せりか
- 編集協力
青木 宏高 牧野 義司
- 発行
(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>
- 印刷
株式会社第一印刷所
- 販売
(一財)農林統計協会
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail publish@aaafs.or.jp
ホームページ <http://www.aaafs.or.jp>
- 定価 514円(税込)

④ご意見、ご提案をお待ちしております。
④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結



アグリフード EXPO 東京 2015

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時 8月18^火日/19^水日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催 JFC 日本政策金融公庫

会場 東京ビッグサイト 西1・2ホール



農業の人材を育む力とは



「はじめての 田植え」 森本 さくらさん 東京都日の出町立平井小学校

■ AFCフォーラム 平成27年4月1日発行(毎月1回1日発行)第63巻1号(776号)
 ■ 発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■ 販売/一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下田黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■ 定価514円 本体価格476円

